大学生のボランティア活動に対する認識（２）

University students' perceptions of volunteer activities

渡邊　圭[1]・千葉　真哉[1]・坂本　泰伸[2]

Kei WATANABE[1] Shinya CHIBA[1] Yasunobu SAKAMOTO[2]

１．はじめに

拙著（渡邊ほか2021）においても指摘をしているが、1995年の阪神・淡路大震災以降に「ボランティア」という言葉が社会的に認識されることとなり、ボランタリーセクターの果たす役割や期待が高まりを見せることとなる。また、この社会的変化に呼応するように、高等教育機関においても学生ボランティア活動が活発化するとともに、その活動を支援するための教育や体制構築などが進められている。

このような中、東北学院大学においても、「TG Grand Vision150」*[1]に基づく形で、学生ボランティア活動を促進するためのさまざまな施策の展開やその体制構築に向けての議論が開始されている状況にある。

1.2　目的

本研究では、今後の東北学院大学における学生ボランティア活動の興隆から、そのための支援体制等の検討に向け、昨年度の調査に引き続く形で、学生が「ボランティア」や「ボランティア活動」に対してどのような認識を有しているかを明らかにすることを目的としている。

1.3　方法

東北学院大学の学生が有するボランティアに対する意識を明らかにするため、２年次開講必修科目「地域の課題Ⅰ」の受講生を対象としたアンケート調査を次節以降で示すとおり実施した。

---

[1]　東北学院大学地域連携センター　TOHOKU GAKUIN University Regional Liaison Center

[2]　東北学院大学教養学部情報科学科/東北学院大学地域連携センター　Department of Information Science, Faculty of Liberal Arts ,TOHOKU GAKUIN University / TOHOKU GAKUIN University Regional Liaison Center

1.3.1　調査対象者

調査対象者は、全学部必修科目である地域教育科目「地域の課題Ⅰ」を履修する学生（2022年度前期履修者数：2,669名）を対象とした。

1.3.2　調査期間

当該科目の開講日時が学部により異なるため、以下の日程にて調査を実施した。

・工学部：2022年５月９日～５月10日

・教養学部，文学部，経営学部，法学部，経済学部：2022年５月18日～５月21日

1.3.3　調査項目

対象学生の「ボランティア」に対する認識を明らかにするために、イメージ調査及び意識調査の二つの調査を実施した。

（１）ボランティアに対するイメージ調査（回収2,504名：回収率93.8％）

「あなたがイメージする“ボランティア”について一言で表わしてください」

（２）ボランティアに関する意識調査（回収2,665名：回収率99.8％）

①ボランティアの参加経験

②これまで参加したボランティア活動

③これまでに参加したボランティア活動の回数

④これまでのボランティア活動の参加動機

⑤ボランティア活動への参加に対する意識

⑥ボランティア情報提供の仕組みについて

⑦参加してもよいと考えるボランティア活動

1.3.4　分析方法

（１）ボランティアに対するイメージ調査については、KHコーダー（Ver.3.Beta.03d）を使用し頻出語を抽出した。抽出にあたっては前処理を行っており、イメージに関する語を抽出するために「名詞B」「動詞B」「形容詞B」「福祉B」「名詞C」「否定助動詞」「形容詞（非自立）」「その他」の品詞を除外している。加えて、より的確にイメージを表す語を抽出するため、「『』」「イメージ」「行う」「ボランティア」の語を除外した。

（２）ボランティアに関する意識調査については、IBM SPSS Statices base（Ver.24）を使用し、各回答項目の単純集計並びに「性別」及び「所属学科」を独立変数と設定して、各項目を従属変数としたクロス集計を実施した。

1.3.5　倫理的配慮

調査実施は、東北学院大学人間対象研究審査委員会による承認を受けたのちに実施した(2022-004号)。

2．調査の結果

（1）本学学生のボランティアに対するイメージ調査の結果

学生が「ボランティア」という言葉とそれが指し示す活動・実践に対してどのようなイメージを有しているのか、ボランティアに対する自由記述内容の「頻出語」の出現回数が100以上の語を抽出すると表1のように示される。

表1「ボランティア」のイメージを指す頻出語（出現回数100以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
活動	1,557	持つ	301	人々	169
社会	779	求める	292	利益	168
無償	626	行動	242	善意	162
自分	611	慈善	219	災害	139
地域	554	奉仕	217	誰か	139
考える	398	困る	197	意思	138
貢献	398	見返り	196	自身	119
参加	376	支援	186	役に立つ	114
思う	337	自ら	179	経験	113
自発	317	助ける	179		

出典：渡邊作成

今回の調査では、対象学生が「ボランティア」に対して持つイメージは、「活動（1,557)」という語が多く見られており、表２に示す昨年度の結果と同じ傾向が見られている。他の頻出語については、前年度の結果（表２）との比較をしたところ、若干の頻出順は異なるものの大きな変化はみられていない。

表２「ボランティア」のイメージを指す頻出語（2021年度調査結果）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
活動	1,202	自発	201	見返り	123
無償	590	困る	192	自ら	117
社会	445	助ける	188	持つ	115
地域	322	求める	163	誰か	107
貢献	288	行動	148	善意	105
自分	274	参加	147	思う	103
奉仕	257	人助け	126	手助け	102
慈善	226	助け合う	124	支援	101

出典：渡邊ほか（2021：10）

また、出現頻度が高い語のうち、その出現パターンが類似している語の関係について可視化すると、図１のような共起ネットワーク図が作成される。なお、共起ネットワーク図の作成にあたっては、語の出現頻度による取捨選択をするため、集計時点で最小出現数を100と設定した。

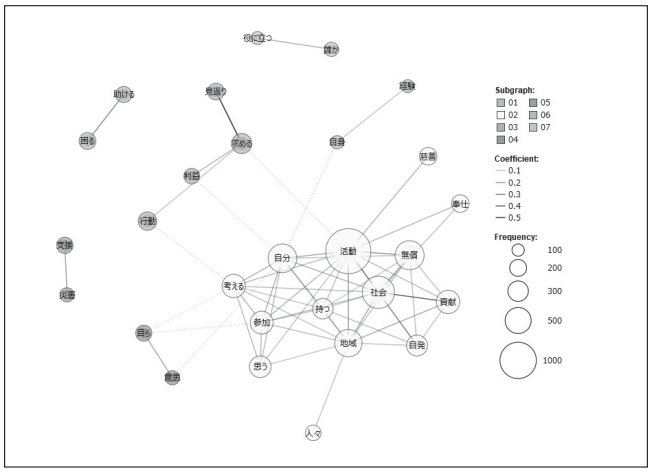


図１「ボランティア」を指す単語の共起ネットワーク図（2022 年度回答）
出典：渡邊作成

この共起ネットワーク図より読み取れるのは、ボランティアの単語について、「無償」「貢献」「自発」「慈善」「奉仕」というような性質を表す単語間での強いつながりが見られていることであるが、同様の傾向は図２に示す2021年度の結果でもみられている。また、両年度とも「社会」「地域」「貢献」などと「活動」の語の間の繋がりが強く表れていることからも、その活動が社会や地域に対する公益性を有すると認識していることがわかる。他、「困る」「助ける」というような語が繋がりを持っていることからも、利他的な活動というイメージを有していると考えられる。

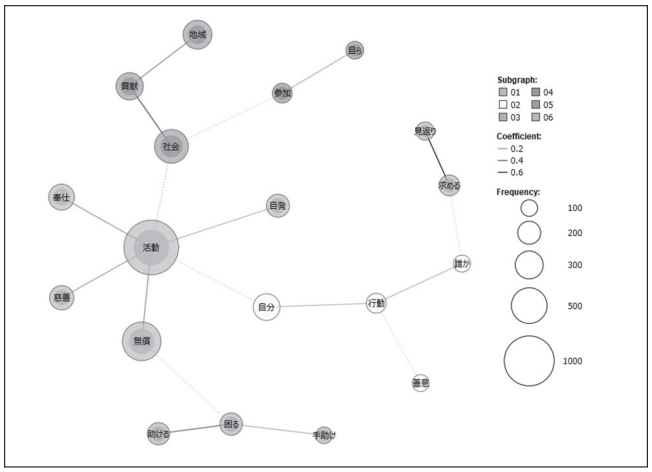


図２「ボランティア」を指す単語の共起ネットワーク図（2021年度回答）
出典：渡邊ほか（2021）

しかしながら、2021年度、2022年度の各共起ネットワーク図を比較していくと、2022年度において「経験」―「自身」という自己学習に関する性質を表すような単語間での繋がりが見られている。また、「災害」―「支援」という語の繋がりがみられているが、これは近年、多発する豪雨災害（令和３年８月豪雨など）の影響があると推察される。

（２）本学学生のボランティアに関する意識調査の結果

本節からは、学生が「ボランティア」という活動・実践に対してどのような意識を有しているのかのアンケート調査の結果をみていく。

１）回答者の属性

アンケート回答者の性別及び所属学科は次表のような回答となる。

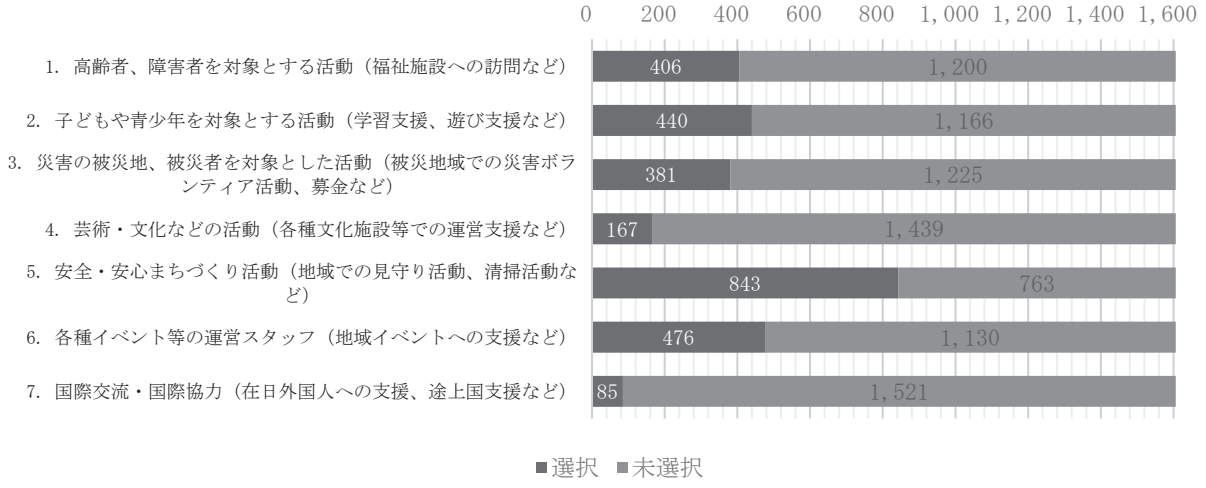
性別	男性：1,806 名（67.8%） 女性 859 名（32.2%）
所属	文学部英文学科：182 名　（6.8%） 文学部歴史学科：170 名　（6.4%） 文学部総合人文学科：　51 名　（1.9%） 文学部教育学科：　51 名　（1.9%） 経済学部経済学科：435 名（16.3%） 経済学部共生社会経済学科：191 名　（7.2%） 法学部法律学科：364 名（13.7%） 工学部機械知能工学科：102 名　（3.8%） 工学部電気電子工学科：112 名　（4.2%） 工学部環境建設工学科：109 名　（4.1%） 工学部情報基盤工学科：　98 名　（3.7%） 教養学部人間科学科：110 名　（4.1%） 教養学部言語文化学科：118 名　（4.4%） 教養学部情報科学科：115 名　（4.3%） 教養学部地域構想学科：111 名　（4.2%） 経営学部経営学科：346 名（13.0%）

２）ボランティア参加経験

ボランティアへの参加経験は、参加経験あり：1,605名（60.2%）、参加経験なし：865名（32.5%）、未回答：195名（7.3%）との回答であった。

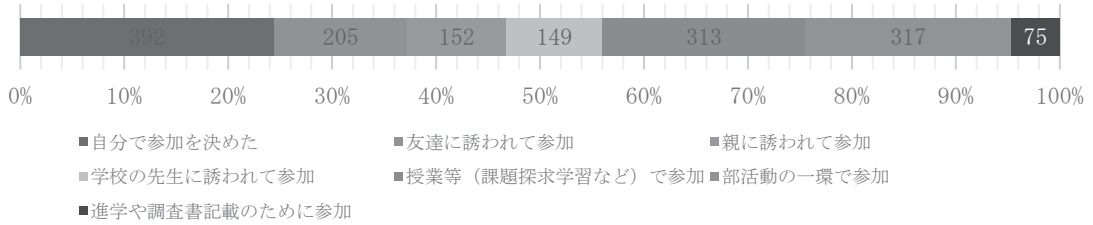
これまで、何かしらのボランティア活動へ参加したことがあると回答している学生が参加した活動内容と動機については、以下のようになっている。

○これまでに参加したことのある活動（複数回答）n=1,605



これまで参加したボランティア活動については、地域での見守り活動や清掃活動などの「安全・安心のまちづくり活動」の回答（843件）が多く、次いで、地域イベント支援などの「各種イベント等の運営スタッフ」という回答（476件）が多く見られるなど、明確な活動対象が存在するような活動よりも、比較的参加しやすい活動への参加した経験が多いよう見受けられる。

○これまで参加したボランティア活動への参加動機　n=1,605



これまでのボランティア参加経験を有する学生のうち、その参加動機については、「自分で活動を決めた（392件：14.7%）」、「部活動の一環として参加（317件：11.9%）」「授業等（課題探求学習など）で参加（313件：11.7%）」の順となっており、自発的な参加よりも、何かしら別な目的の一環としての参加が多い傾向にあるようにみてとれる。

○これまでに参加したボランティアの回数　n=1,605

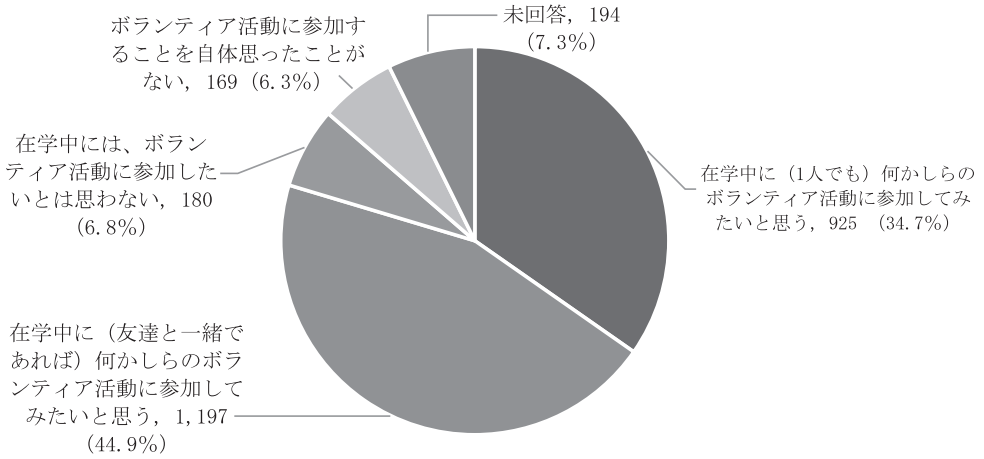
これまでのボランティア参加経験を有する学生が参加した回数については、最小１回、最大

360回、平均4.43±10.857（男性：4.30±12.980、女性：4.66±5.355）である。所属毎の参加回数の分散は男女別に以下のように示される。

所属		平均値	標準偏差	度数	所属		平均値	標準偏差	度数
文学部英文学科	男性	3.52	2.530	56	経済学部経済学科	男性	3.48	3.602	191
	女性	3.67	4.079	73		女性	4.76	4.493	59
	総和	3.60	3.481	129		総和	3.78	3.860	250
文学部歴史学科	男性	4.69	6.350	42	経済学部共生社会経済学科	男性	3.49	4.465	71
	女性	5.67	6.083	42		女性	6.83	10.721	46
	総和	5.18	6.200	84		総和	4.80	7.700	117
文学部総合人文学科	男性	2.79	2.424	14	法学部法律学科	男性	4.22	9.084	131
	女性	4.50	3.414	14		女性	3.31	2.336	64
	総和	3.64	3.033	28		総和	3.92	7.567	195
文学部教育学科	男性	5.10	3.573	10	教養学部人間科学科	男性	5.08	9.686	25
	女性	7.29	6.734	24		女性	3.58	2.657	38
	総和	6.65	6.009	34		総和	4.17	6.410	63
工学部機械知能工学科	男性	3.06	2.143	53	教養学部言語文化学科	男性	3.14	1.512	14
	女性	9.00	8.485	2		女性	4.54	3.227	63
	総和	3.27	2.649	55		総和	4.29	3.030	77
工学部電気電子工学科	男性	5.37	13.854	59	教養学部情報科学科	男性	11.40	52.089	47
	女性	1.00	－	1		女性	4.28	4.443	18
	総和	5.30	13.747	60		総和	9.43	44.336	65
工学部環境建設工学科	男性	3.64	2.902	44	教養学部地域構想学科	男性	4.17	3.674	41
	女性	1.75	1.389	8		女性	5.77	7.121	35
	総和	3.35	2.800	52		総和	4.91	5.553	76
工学部情報基盤工学科	男性	5.79	11.367	38	経営学部経営学科	男性	3.66	3.088	146
	女性	5.20	4.438	5		女性	4.42	4.657	65
	総和	5.72	10.758	43		総和	3.90	3.649	211
総和						男性	4.30	12.980	982
						女性	4.66	5.355	557
						総和	4.43	10.857	1539

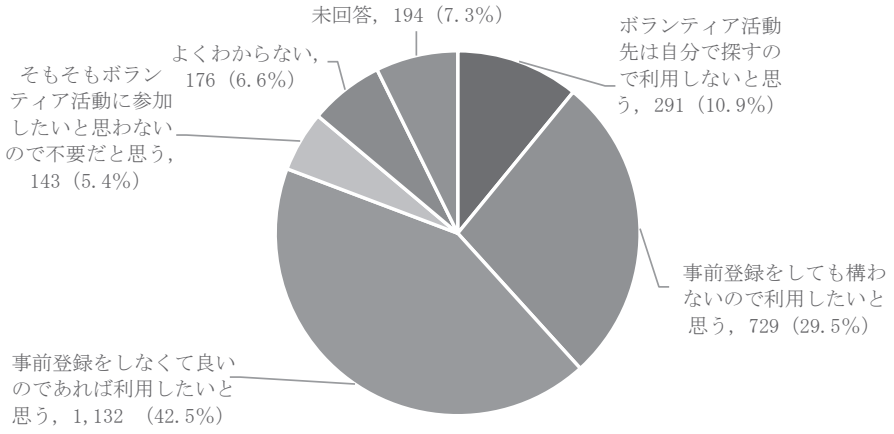
3）ボランティアへの参加意識

在学中におけるボランティア活動への参加意識については、「友達と一緒であれば、何かしらのボランティア活動に参加してみたいと思う（1,197件:44.9%）」が４割を占め、次いで、「１人でも何かしらのボランティア活動に参加してみたいと思う（925件:34.7%）」の回答順となっており、回答者の８割弱が在学中に何かしらのボランティア活動への参加を希望していることがわかる。



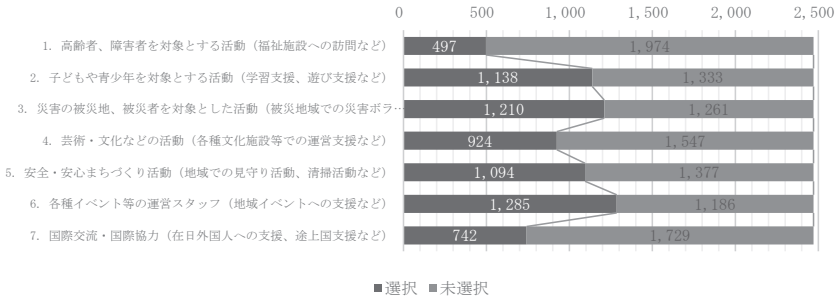
４）ボランティアに関する情報を得るための事前登録の仕組みについて

大学からの活動支援の一環として、ボランティアに関する各種の情報（内容や場所）の提供の仕組みに関する事前登録を学生がどのように捉えるのかという設問に対して、「利用したいと思う（1,861：72.0%）」というように、登録の有無にかかわらず大学からの何かしらのボランティア情報の提供を求めている学生が多くいることが分かる。しかし、内訳で見た場合、回答者全体のうち４割近くの学生が「事前登録をしなくて良いのであれば利用したいと思う（1,132件：42.5%）」と回答しており、情報提供を受けたいもののそのための事前登録については希望していない。また、「ボランティア活動先は自分で探すので利用しないと思う（291件：10.9%）」と１割ほどの学生からは自己開拓意欲が感じ取れる。



５）参加を希望する活動（複数回答）

最後に、回答時点で学生がどのようなボランティア活動への参加を希望しているのかについては、各対象別に以下のようになっている。

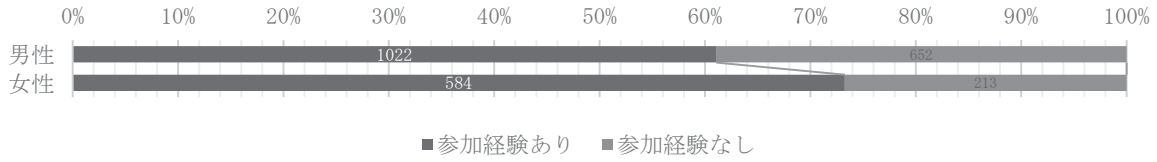


回答の傾向としては、「各種イベント等の運営スタッフ（1,285件）」、「災害の被災地、被災者を対象とした活動（1,210件）」の順であり、活動対象や内容が明確であり、かつ、単発型ないし短期間の活動への関心が高いと読み取れる。しかし、「子どもや青少年を対象とする活動（1,138件）」、「安全・安心のまちづくり活動（1,094件）」などのような回答もみられることからも、特定の活動への興味・関心の偏りはみられない。

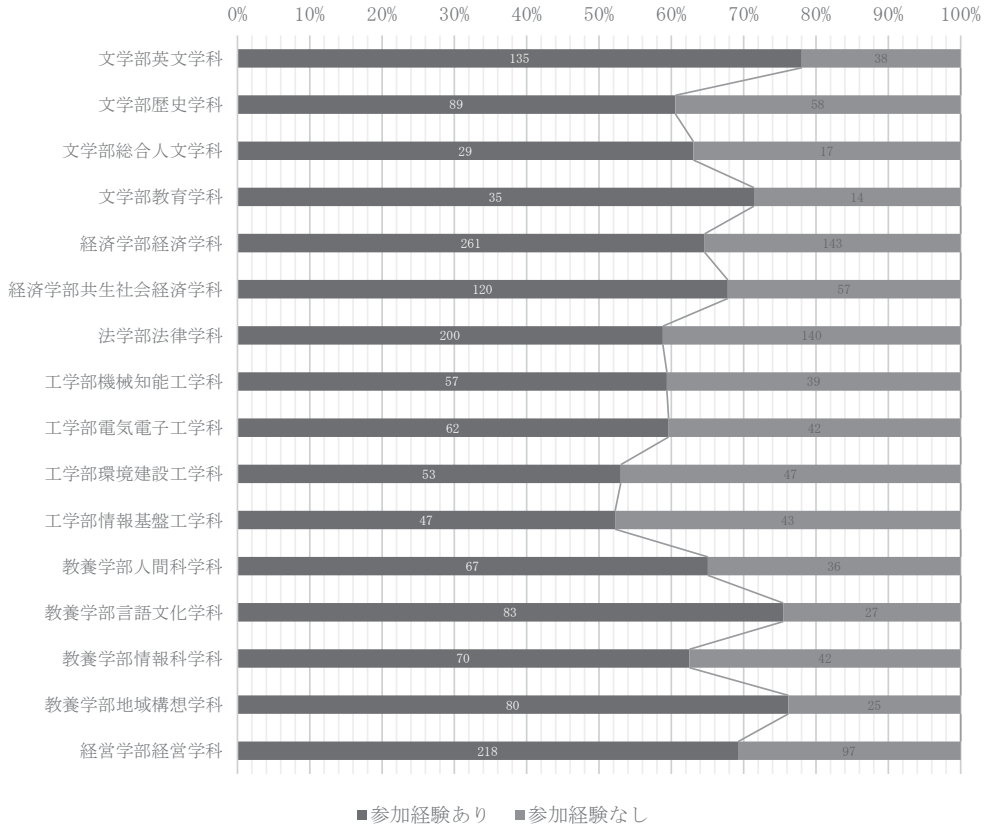
６）クロス集計（性別・所属学科）

○ボランティア活動への参加経験

①性別



②所属学科



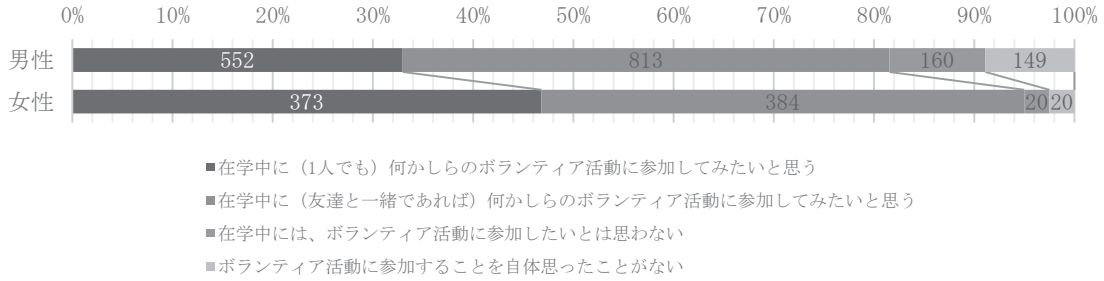
これまでのボランティア活動への参加経験については、性別では、女子学生の方が10％ほど男子学生より高い。また、学科別にてみていくと、「文学部英文学科」「文学部教育学科」「教養学部言語文化学科」「教養学部地域構想学科」の４学科では回答者の７割がこれまでのボランティア活動への参加経験があると回答している。

2021年度のデータと比較すると、男性より女性の方が参加経験の回答が高い傾向は変わらないものの、2021年度には、性別別の参加経験が男子学生は、62.1％→61.0％とほぼ横ばいであるが、女子学生は68.0％→73.2％となっており、ボランティア活動などへの参加意識の高い女子学生が増えていると考えることができる。

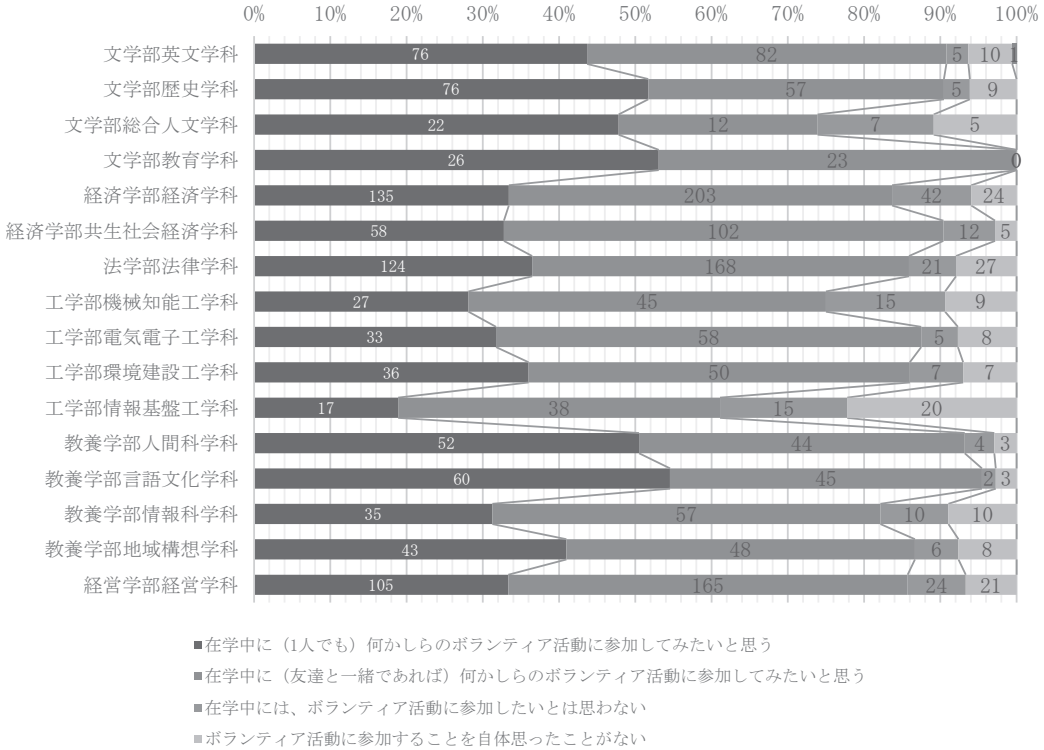
また、所属学科に関しては、2021年度において７割を超えたのが、「文学部英文学科」、「文学部教育学科」、「経済学部共生社会経済学科」の３学科であった（渡邊ほか2021：14）。2022年度には、ボランティア経験があるとの回答者が７割以上である学科が４学科に増えていることからも、コロナ禍という制限された状況にあるものの何かしらのボランティア活動を経験した学生が増えていると考えることができる。

○参加意識

①性別



②所属学科

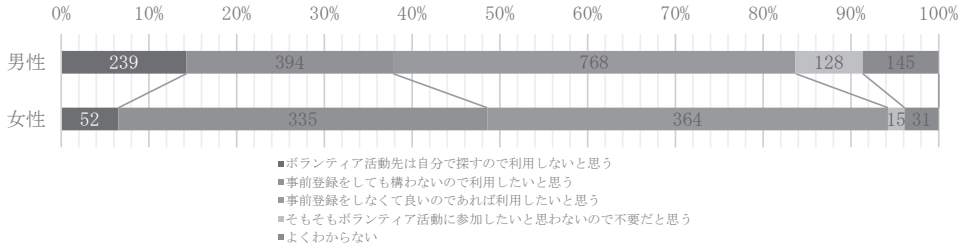


参加意識についても、参加経験と同様に、女子学生の方が、在学中のボランティア活動への参加を希望する割合が高いようにみえる（男子学生：81.5％、女子学生：94.9％）。所属学科別

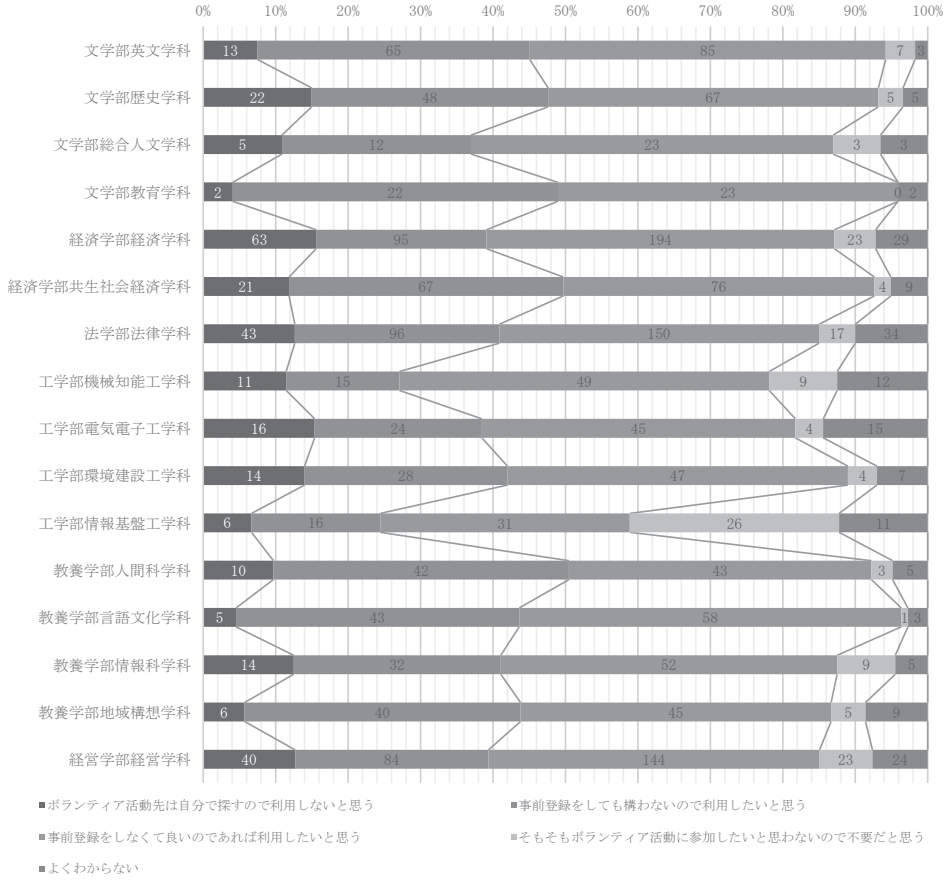
では、「何かしらのボランティア活動に参加してみたいと思う」という回答が「文学部英文学科」「文学部歴史学科」「文学部教育学科」「経済学部共生社会経済学科」「教養学部人間化学科」「教養学部言語文化学科」の６学科では８割を超えている。2021年度の回答傾向と同様に2022年度においても、「友達と一緒であれば何かしらのボランティア活動に参加してみたいと思う」の傾向が多いことからも、本学の学生は、何かしらのボランティア活動への参加意欲はあるものの、友達や仲間と一緒であることでより参加意識が高まると考えることができる。

○ボランティアに関する情報を得るための事前登録の仕組みについて

①性別



②所属

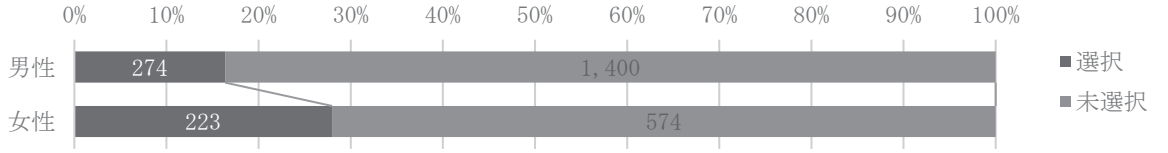


ボランティア関連の情報を得るため事前登録の仕組みについて、多くの学生は、何かしらの情報が得られる体制を希望しているものの、手続き等に抵抗があるのか、「事前登録をしなくても良いのであれば利用したいと思う」との回答がなされている。この点に関しては、どのような手法にてボランティア活動に関する情報を得たいと考えているのか、また、どのような理由から事前登録に対する抵抗があるのかについて調査する必要がある。

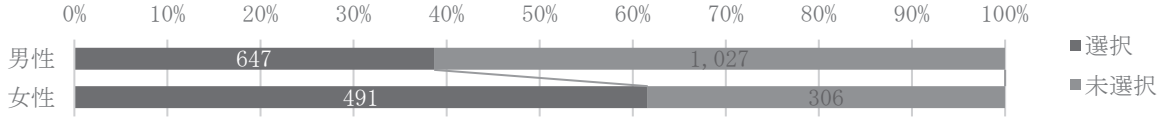
○参加を希望するボランティア活動

①性別

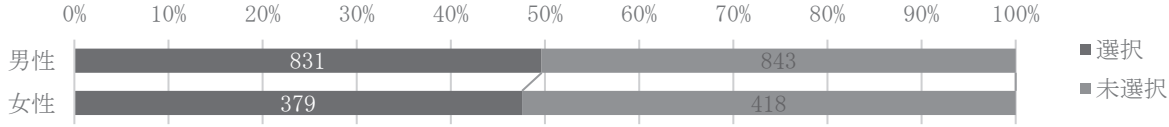
高齢者・障害者を対象とした活動



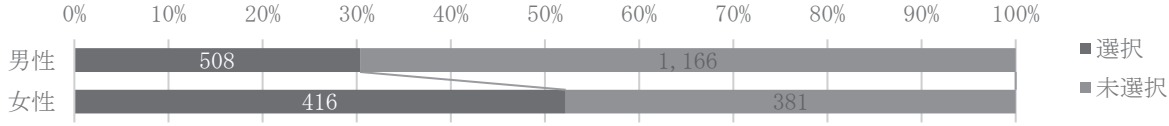
子どもや青少年を対象とする活動



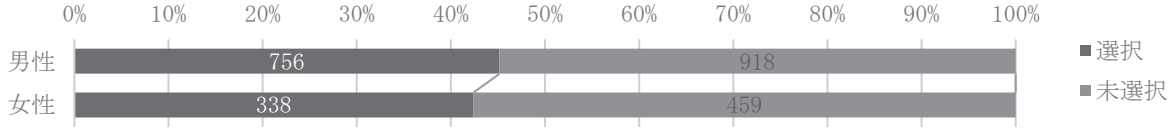
災害の被災地・被災者を対象とした活動



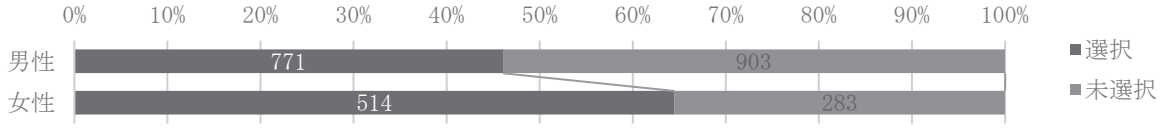
芸術・文化などの活動



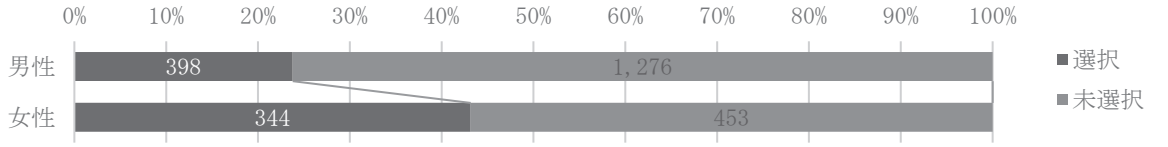
安心・安全・安心のまちづくり活動



各種イベント等の運営スタッフ

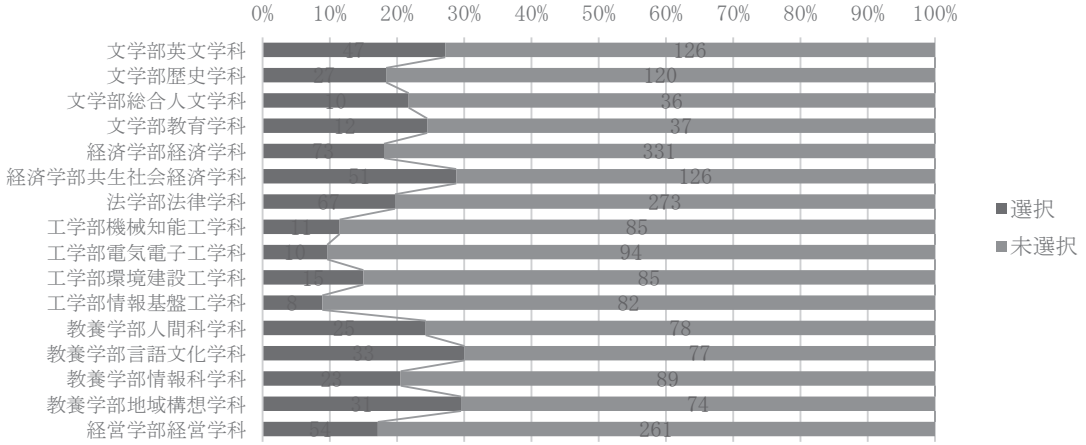


国際交流・国際協力

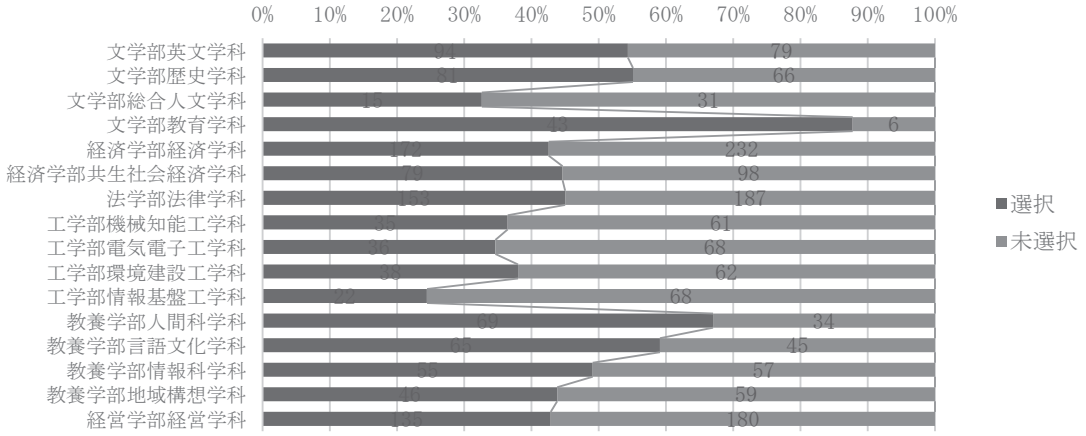


②所属学科

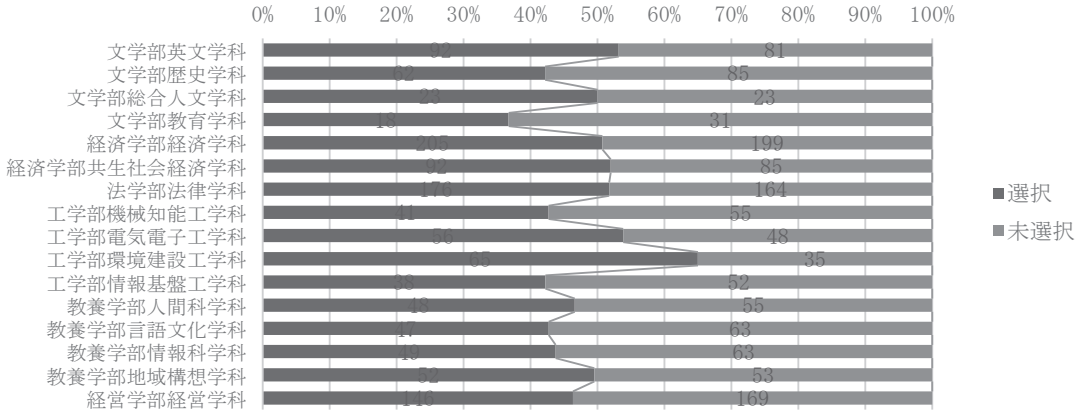
高齢者・障害者を対象とする活動



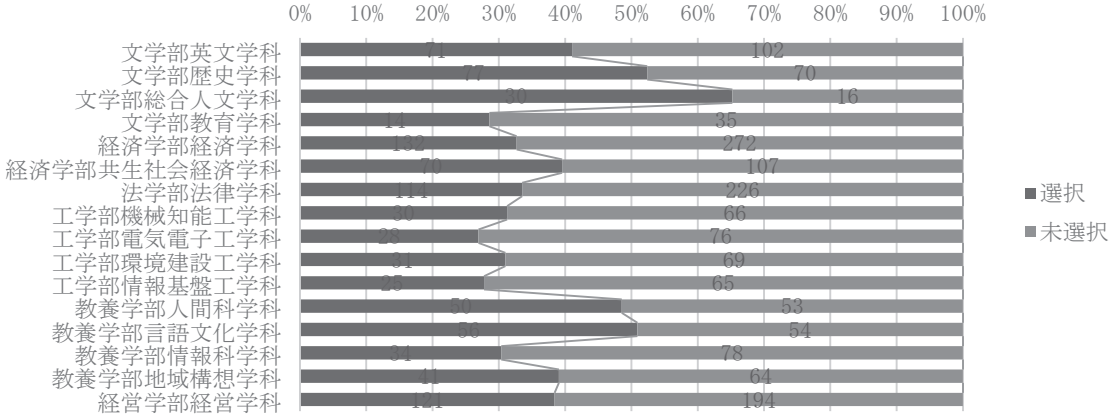
子どもや青少年を対象とする活動



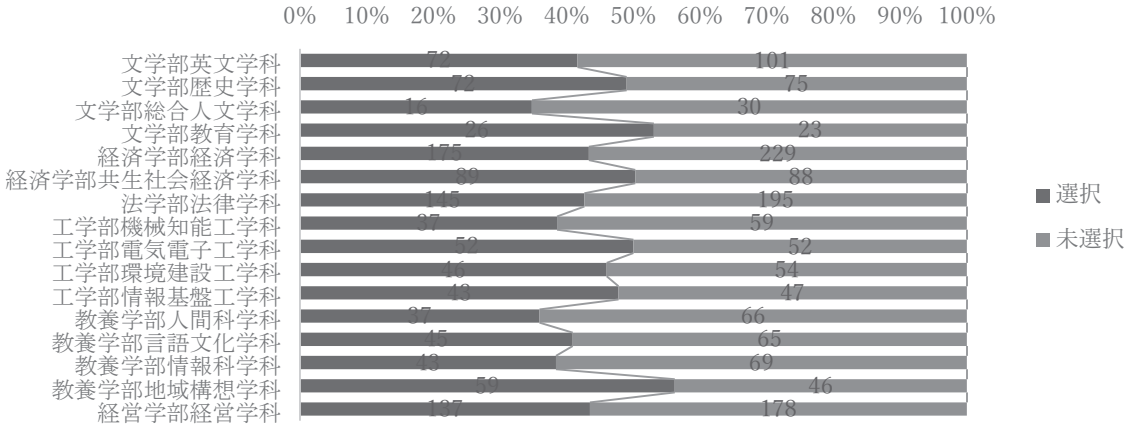
被災地・被災者を対象とした活動



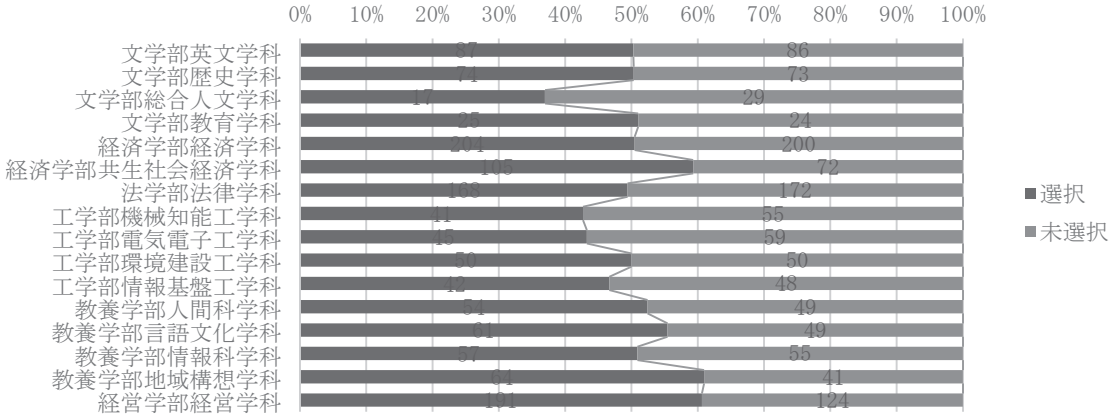
芸術・文化などの活動



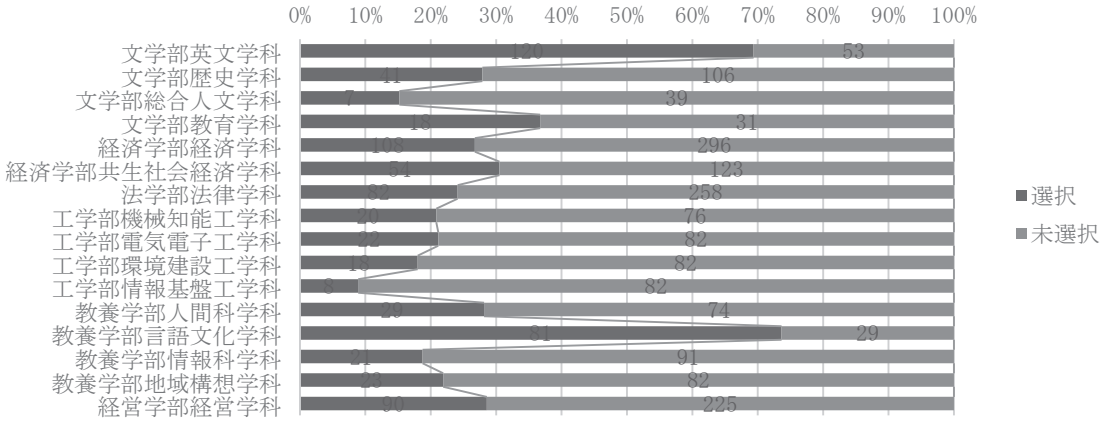
安全・安心のまちづくり活動



各種イベント等の運営スタッフ



国際交流・国際協力



今後、参加を希望する活動に関しては、2021年度の調査結果（渡邊ほか2021：20）においても指摘しているように、東北学院大学においては、男子学生よりも女子学生の方が参加を希望するボランティア活動の対象の幅が広いことがわかる。また、所属する学科と希望する活動に関しては、昨年度の結果と同様に、「文学部教育学科」の学生は「子どもや青少年を対象とした活動」を選択する傾向が多く、「文学部英文学科」「教養学部言語文化学科」の学生は「国際交流・国際協力」を選択する傾向がみられている。

４．考察

4.1　ボランティアへのイメージについて

ボランティアに関するイメージについては、先述したように「活動（1,557）」やそれ自体が

何かしらの「活動」を指す語が抽出されている。また、他の頻出語に関しては、2021年度の調査と同様に「自発」「無償」「奉仕」「慈善」などの単語が多く抽出されていることからも、東北学院大学生が「ボランティア活動」を利他的な活動としてイメージしていると考えることができる。加えて、共起ネットワーク分析において、「偽善」「強制」「強要」「動員」といったネガティブな語が出されていないことからも、「ボランティア」に対してポジティブないし肯定的なイメージを有していることがわかる。

しかし、大学生のボランティア活動に対するイメージの因子構造[*2]を検討した、荒木（2016）において

> 「イメージと参加志向動機・不参加志向動機の密接な関係性を読み取ることが出来たと言える。そして、ボランティア活動への参加志向動機を高めるには、自己実現イメージの醸成と否定イメージの低減や親和援助イメージ・具体的活動イメージの肯定的イメージへの形成を図ることが効果的であり、各段階の学校教育でのボランティア教育において、ボランティア活動に対するイメージへ訴求する工夫も必要であることが示唆された」（荒木2016：91）

と指摘がなされているように、「ボランティア活動」のイメージと具体的な活動の関係性という点より、ボランティア教育や活動支援を展開していくにあたり、東北学院大学の学生が有するイメージを如何により肯定的イメージへと涵養していくかの方法を検討していく必要があると考えられる。

4.2　ボランティアへの意識について

2021年度の回答と同様に、2022年度の調査においても回答者の８割以上が在学中に何かしらのボランティア活動への参加を考えていることがわかった。また、「性別」「所属学科」と各項目のクロス集計からは、女子学生の方が男子学生よりもボランティア活動に対するモチベーションが高いようにみえる。一方で、「所属学科」と各項目のクロス集計からは、2021年度の調査結果と同様に、所属学科において学ぶ専門性と希望する活動の関係性もみられている。そのため、いかに所属学科で学ぶ専門性を実践に移せるようなコーディネートや活動支援策の検討が求められるといえる。また、性別、所属問わずに参加を希望する活動については「各種イベント等の運営スタッフ」や「被災地・被災者を対象とした活動」という単発的なボランティア活動を好むような回答の傾向が、2021年同様に2022年度の調査においてもみられていることからも、東北学院大学の学生ボランティア活動への支援においては、「気軽に参加できる」と「専門的知識・技術を活かす、学んだことの実践」という異なる方向性からのアプローチが重要になると考えられる。

5．おわりに

2023年４月１日に東北学院大学では、五橋キャンパスが開学することで、これまで土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパスという物理的距離により分断されていた学生の諸活動が集約されることとなる。それに伴い、正課外の学生ボランティア活動を支援するための仕組みである「総合ボランティアステーション」が設置され、より多くの学生がボランティア活動に参加する機会が拡大し、それらの活動を通じた様々な社会貢献活動が展開されると考えられる。

東北学院大学において学生ボランティア活動が活性化していくことは、2006年の教育基本法および2007年の学校教育法の改正によって大学の新たな使命として「社会貢献」が追加されたことや、2013年から開始された大学COC事業などが少なからず影響している部分があるものの、福音主義的キリスト教の信仰に基づき地域に貢献する人材の育成という建学の精神が体現化されていくことであると考えられる。特に、今回の調査においても、昨年度と同様に学生の多くがボランティア活動への参加を希望していること、ボランティア活動に対して肯定的なイメージを有していること、大学で学ぶ専門性と希望するボランティア活動に関係性が見られていることなどからも、ボランティア教育の展開がスクールモットーである「LIFE LIGHT LOVE」を体現する人材の育成へとつながると考えることができる。

しかしながら、2021年度から継続して実施している学生へのボランティアに関する調査については、定量的なデータを取得し、東北学院大学生の傾向を掴むことはできたものの、その言葉と具体的な行為をどのように結びつけているのかという分析には至っていない。加えて、コロナ禍において制限された環境において行われるボランティア活動はコロナ禍前に行われていた活動と比較すると多くの制限や制約下での活動とならざるを得ない状況にある。このような中でもモチベーションを保ち、継続したボランティア活動や実践を展開している学生が一定数存在していることからも、どのような要因が学生の意思に影響を及ぼしているのかなど、今後の東北学院大学におけるボランティア教育や支援に生かすべき重要なデータを取得・分析することも求められると考えられ、東北学院大学の学生ボランティア活動の興隆に向けた調査課題の整理と調査の継続実施が今後の課題となるといえる。

先述のように2023年度に五橋キャンパスが開学し、「総合ボランティアステーション」が設置され、学生のボランティア活動の受け皿が整備されることと同じタイミングにて、全学向けの「地域ボランティア活動の探究」という科目が開講される。このことは、本学において、ボランティア教育と活動・実践を接続していく仕組みが始動することでもあり、その仕組みの円滑な作動に本調査の結果が活用されることを願うものである。

謝辞

本研究は、2022年度東北学院大学学長助成「学生ボランティア活動への効果的な教育・支援体制の構築（研究代表：坂本泰伸）」の研究成果の一部である。

注

＊1　東北学院大学では、2016年度から創立150周年となる2036年度までの20年後を見据えた１期５年を計画期とした中長期計画「TG Grand Vision 150」を策定しており、建学の精神に基づく教育･研究の方向性を定めている。同中期計画にて、2021年度から開始された第Ⅱ期中期計画の政策目標として「地域の課題解決を図る社会貢献型事業を展開することによって、地域の持続的発展に貢献する。」ことを目的に「地域の持続的発展に貢献するためのボランティアステーションの体制強化」として、学生ボランティア活動の促進とそのための教育や支援体制のあり方が検討されている。

＊2　荒木（2016）は、首都圏の四つの４年制大学の大学生542名（男子256名、女子286名）を対象として実施したアンケート調査をもとに、大学生のボランティア活動に対するイメージの因子構造を明らかにしており、ポジティブな因子の自己実現は、主に内発的な参加志向同期の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向に正の影響を及ぼし、ネガテイブな不参加志向同期の利己優先志向・活動否定志向に負の影響を及ぼすと指摘している。

文献一覧

1　渡邊圭・千葉真哉・齋藤渉（2021)「大学生のボランティア活動に対する認識」，東北学院大学教育研究所教育研究所報告集，22，5-26.

2　荒木俊行（2016)「大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」，日本教育工学会論文誌，40（2)，85-94.